

高齢起業家

筆者が属する MBO 実践支援センターが事務局をお願いしている株式会社エム・シー・ピーの前社長の話です。

前社長は、株式会社エム・シー・ピー（「情報に力を与える仕事」「お客さまのハウス・エイジェンシー」として、パブリック・リレーションの機能を担う専門企業）の創業者。30年にわたり第一線で経営の指揮を執られました。それと併行して、複数の大学で教員として学生を指導されました。もともとはグラフィック・デザイナーとのことですが、筆者には経営者兼教育者という印象が強い方です。



中嶋哲夫の

「人事も歩けば」



70歳を前にして、経営を後継社長に譲るとともに、それを機にカフェを起業。現在はカフェが主たる仕事。週に1回ずつは大学と会社に出勤し、残りはカフェの親父をやっておられます。「暇つぶし」と嘯きながら木屋町二条に落ち着いた店を開かれています。

カフェの名前は「丁の字カフェ」。道路が丁の字になっている場所が名前の由来。木屋町筋を高瀬川沿いに北に歩き、二条通りにぶつかる場所にあります。烏津記念館に隣接し、近辺には高瀬舟の船着き場や京都市役所があります。また、明治3年に京都舎密局が設置



▲丁の字カフェ

され、京都における西洋科学の発祥の地ともいえる、京都の中心部に位置しています。古い建物を活かした店内は木の香りがして、落ち着いた椅子がならび、ゆったりと過ごすことができます。

先日、店の2階で数人の研究会をやらせていただきましたが、コーヒーとカレーを楽しみながら文化的な研究会を開くことができました。

筆者が感心するのは、70歳近くになって起業をする人が身近におられたこと。伊能忠敬や立石一真は高齢起業家として有名ですが、さすがに50歳代です。70歳の起業を「暇つぶし」と言いつつ、デザイナーらしい空間を創造されるエネルギーに敬服します。それと同時に、「暇つぶし」にふさわしい程度にお客さんがやってきて、忙しすぎず暇すぎない程度にカフェが繁栄し、そこでの談論が次の創造につながるような空間に育つことを願います。

(MBO 実践支援センター代表)